



乱世の恋と治世の恋 : 張愛玲「傾城の恋」から施叔青「慄細怨」へ

高, 尚

(Citation)

海港都市研究, 19:25-37

(Issue Date)

2024-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100488379>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100488379>



乱世の恋と治世の恋

——張愛玲「傾城の恋」から施叔青「憐細怨」へ——

高 尚

(GAO, Shang)

I. はじめに

1941年12月25日、日本軍によって香港は陥落した。張愛玲（1920-1995）はこの乱世を背景にして男女の恋愛と結婚の物語の「傾城の恋」⁴⁵（1943）を描いたが、それはモダンクラシックとして長く読み継がれることになった。その約40年後、太平の世の香港で、現代社会に生きる自立した女性が肉欲に溺れもがき苦しむ物語「憐細怨」⁴⁶（1984）が施叔青（1945-）によって書かれた。本論では、それぞれ乱世、治世の香港を舞台にした恋愛を描く二人の作家の対比を試みる。

「現代中国で最も重要で優秀な作家」⁴⁷ [夏 2001:335]と見做されている張愛玲は、1939年、第二次世界戦争の勃発により、留学先をロンドン大学から香港大学に変更せざるを得なくなった。さらに、香港が陥落したために彼女は1942年に上海に戻り、翌年には、香港を題材にした「傾城の恋」、「第一炉香」⁴⁸（1943）、「第二炉香」⁴⁹（1943）などの小説を「香港伝奇」シリーズとして発表し、「上海人の視点を借りて香港を観察しよう」と試みていた⁵⁰と説明した。一方、施叔青は外来者の視点から香港を観察し、1980年代に「憐細怨」を含む「香港物語」⁵¹と呼ばれる一連の小説を創作している。

施叔青の本名は施淑青、1945年に台湾の古都、鹿港に生まれている。1965年に短編小説「やもり（壁虎）」を発表して文芸界にデビューし、1970年にニューヨーク市立大学に留学して演劇学修士を取得している。国立政治大学、淡江大学、世新大学で教鞭を執ったのち、アメリカ人の銀行家である夫と香港に渡り、17年間暮らした。死、性、狂気が施叔青作品に繰り返し表れる主題である。その主題を表現するために、施叔青はしばしばヘビ、ネズミ、ヤモリなどを比喻、象徴などの方法で描いている⁵² [王/鄭 1983:141]。

⁴⁵ 張愛玲「傾城の恋」(初出は『雑誌』第11巻第6期、第12巻第1期、1943年9月、10月)。本論での使用テキストは、張愛玲^(著) 池上貞子(訳)『傾城の恋』(平凡社、1995年、157-243頁)。

⁴⁶ 施叔青「憐細怨」(初出は『聯合報』、1981年7月)。本論での使用テキストは、施叔青『憐細怨』(上海文芸出版社、2003年、196-227頁)。以下、本論の翻訳に関しては、特に注を附さない限り本論執筆による。

⁴⁷ 夏志清(著) 劉紹銘等(訳)『中国現代小説史』(香港中文大学出版社、2001年、335頁)。

⁴⁸ 張愛玲「第一炉香」(初出は『紫羅蘭』第2-4期、1943年2月-4月)。本論での使用テキストは、張愛玲(著) 濱田麻矢(訳)『中国が愛を知ったころ：張愛玲短篇選』(岩波書店、2017年、3-90頁)。

⁴⁹ 張愛玲「第二炉香」(初出は『紫羅蘭』第6期、1943年6月)。

⁵⁰ 張愛玲^(初稿是上海人) 初出は『雑誌』第11巻第5期、1944年12月)。本論での使用テキストは、張愛玲^(著) 藤井省三(訳)『傾城の恋／封鎖』(光文社古典新訳文庫、2018年、11頁)。

⁵¹ 「香港物語」シリーズは十篇の短編小説で構成されている。それぞれは「憐細怨」「窰變」「票房」「冤」「一夜遊」「情探」「尋」「驅魔」「晚晴」「相見」である。

⁵² 王晋民；鄭白曼(編著)『台湾与海外華人作家小傳』(福建人民出版社、1983年9月、141頁)。

「傾城の恋」と「慄細怨」の関係についてはすでに指摘がある。黄静⁵³ (2005) は、二人の女性主人公の異なる価値観と運命の対比を通し、両作品は異なる観点から「霊肉一致」の「ロマンチックラブ」という神聖性を解消したと指摘する[黄 2005:30-35]。趙玉茵⁵⁴ (2011) は、両作品における離婚した女性主人公の「家出」と「復帰」行為を分析し、異なる時期におけるそれぞれの女性解放の道の障害を反映したものと結論づける[趙 2011:6-7]。成湘麗⁵⁵ (2012) は創作手法の角度から二つの小説を比較し、物語の筋書きとドラマタイズという面では「慄細怨」は張愛玲の影響を超越しているとする[成 2012:23-25]。では、「外来者」として香港に関する作品を書いたこの二人の作家の創作にはどのような違いがあるだろうか。

先行研究は女性主人公に焦点をあてて両作品を比較・分析しているが、両作品の重要な共通点である「帰国後に恋をする華僑」という形象は十分な注意を払われていない。「傾城の恋」に書かれた華僑は男性で「慄細怨」では女性、そして結末もハッピーエンドとバッドエンドというように異なっている。この違いから何か見えてくるものがあるだろうか。

本論は、まず先行研究に基づいて「慄細怨」における張愛玲の影響を分析する。また、華僑という観点から、「傾城の恋」の男性主人公及び「慄細怨」の女性主人公が憧れている「中国的イメージ」がどのように表現され、その「中国的イメージ」が二人の恋愛にどのような役割を果たしているかを比較する。最後に、1940年代と1980年代の時代背景を比較しながら、二つの恋愛物語の結末が異なる原因、そして施叔青の創作の独自性について明らかにする。

II. 張愛玲「傾城の恋」と施叔青「慄細怨」

1960年代に夏志清によって張愛玲が「現代中国文学史の中で魯迅に続く優秀な作家」⁵⁶と認められて以降、彼女に対する研究は隆盛を極めている。王德威⁵⁷は、中国、香港、台湾の作家たちが張愛玲の小説を模倣し、徐々に「張派」という作家群が形成されたと説明し、施叔青を「張派の重要な後継者」と見なした[王 2004:2]。これに対して、施叔青も自分が「張愛玲ファン」であることを認め、張愛玲への愛着を隠さずに表現した。施叔青は「しばらくの間、私はこれ以上の影響を受けることを恐れ、張愛玲の本を隠し、彼女にかき乱されることを恐れて読む勇氣さえなかった。最近になってようやく、その恐れが麻痺したと感じるようになり、思い切って張愛玲の作品を読んでみた。読めば読むほど、もっと好きになり、彼女の偉大さを感じた」⁵⁸と述べている[施 1997:223]。

さらに、施叔青はインタビューで「張愛玲の『傾城の恋』は香港の陥落が白流蘇の恋を成就させたという

⁵³ 黄静「香港・女性・伝奇—《傾城の恋》、《香港的情与愛》、《慄細怨》比較」(『華文文学』第69期、2005年4月、30-35頁)。

⁵⁴ 趙玉茵「一個故事的兩種講法—比較閱讀張愛玲《傾城の恋》、施叔青《慄細怨》」(『青年文学家』、2011年2月、6-7頁)。

⁵⁵ 成湘麗「契合与偏離—論《慄細怨》对《傾城の恋》的寄情書写」(『名作欣賞』、2012年8月、23-25頁)。

⁵⁶ 注2所掲書、335頁。

⁵⁷ 王德威『落地的麦子不死—張愛玲与張派传人』(山東画報出版社、2004年、2頁)。

⁵⁸ 施叔青「我們三個姊妹与張愛玲」(『李昂施叔青散文精粹』、花城出版社、1997年、223頁)。原文:「有一陣子我怕再繼續受到影響,把她的書藏起來,看都不敢看怕受她幹擾,直到最近,感到自己癱瘓了,才敢來看,愈看愈覺得喜歡,愈看愈覺得偉大。」

物語だが、私は香港では決して結ばれない恋人を書きたい。香港返還が彼らの恋を成就させるのだ——海外で」⁵⁹と語ったことがあったが、今に至るまでそのような小説が創作されていない。それは、施叔青が「慄細怨」で「傾城の恋」へのオマージュをすでに完成させ、成功を収めたからだと分析する研究者もいる⁶⁰〔成 2012:23〕。

香港に対する叙述についても、施叔青は「香港に住んでいる私にとって、張愛玲の作品に登場する人物や物事は実質的な意味を持ち、もはや紙の上のフィクションではなくなる」「この華洋雑居の社会に住んでいると、張愛玲が経験した植民地特有の風情や俗事を経験できる……私の香江経験はただそれを別の口調に置き換え、別の情緒で復唱しているにすぎない」⁶¹と張愛玲の影響の大きさに言及している〔金 2003:238〕。施叔青の「香港物語」は張愛玲の「香港伝奇」に大きな影響を受けていたことは間違いない。では、その影響は施叔青の「香港物語」の一つである「慄細怨」にどのように表れているのだろうか。まずは「傾城の恋」と「慄細怨」のあらすじを確認してみよう。

「傾城の恋」の舞台は上海と香港である。出戻り女性として実家の大家族の中で肩身の狭い思いをしていた白流蘇は、異母妹のお見合いの場でイギリス育ちの青年実業家范柳原に見初められた。白流蘇は自分の人生の転機になりうると感じ、范柳原との結婚の可能性に賭けて香港へ行く。范柳原は白流蘇を「本物の中国人女性」と評価し、彼女に並々ならぬ関心を示した。白流蘇と范柳原の恋の駆け引きが物語の前半の内容である。范柳原が白流蘇を情婦にして、仕事のために香港を出航した直後に太平洋戦争が始まった。その影響で香港の街が荒廃した時、二人はお互いに頼れる者が相手しかいないことに気づき、結婚という形で結ばれる。まさに香港が乱世だったからこそ、白流蘇は范柳原と結婚することができたのだ。では、40年後の治世香港では、恋愛物語はどのような形で演じられたのだろうか。

「慄細怨」の女性主人公慄細（スージー）は香港で育ち、アメリカの大学に進学した。アメリカ人のディック（狄克）と恋愛して結婚し、二人は「中国を探す」という希望を持って香港に移住する。しかし、「中国を探す」ことは叶わず、ディックは別のアメリカ人女性と浮気して慄細と離婚した。慄細は中国の印刷工場社長の洪俊興と出会い、彼の「純粋な中国人男性の可愛らしさ」に惹かれたが、どうしても「すべてにおいて自分より劣っている」男性を受け入れられず、洪との関係を断ち切ろうとする。しかし、ある日突然の雷雨と雹に驚いた慄細は、傍らにいる洪俊興が自分が唯一頼りにできる人だと悟り、理性を捨てて彼と肉体関係を持った。二人の間には大きな違いがあることを知りながらも、慄細は肉体的な寂しさから洪と別れることができない。彼女は一瞬だけ洪を結婚相手として考え、洪からの贈り物を受け取ろうとした。しかしある日、喧嘩の末彼女は洪俊興との関係が「売買」にすぎないことを悟り、ついに憤然として離れた。

あらすじから見ると、「傾城の恋」と「慄細怨」には多くの共通点がある。例えば、「傾城の恋」の范柳原と「慄細怨」の慄細は海外で長年「西洋式教育」を受けてから中国（香港）に帰ってきている。二人が異性

⁵⁹ 施叔青『一夜遊—香港的故事』（香港三聯書店、1985年、308頁）。原文：「張愛玲的《傾城之戀》寫香港的陷落成全了白流蘇，我想寫一對本來在香港不可能結合的戀人，因為一九九七成全了他們——在國外。」

⁶⁰ 注11所掲論文、23頁。

⁶¹ 金宏達（編）『回望張愛玲・華麗影沈』（北京文化藝術出版社、2003年、238頁）。原文：「旅居香江，張愛玲筆下的人與物，對我有著實質的意義，不再是紙上的虛構。」「躋身這華洋雜處的社會，經歷著張愛玲經歷過的殖民地的特有的風情世故……我的香江經驗只不過是換成另一種語氣、另一種情調在復述。」

に投影した「中国的イメージ」、つまり「真の中国人女性」としての白流蘇や、「純粋な中国人男性」としての洪俊興は、恋愛関係を推進する重要な要素である。しかし、最も忘れてはならないのは、「傾城の恋」と「憐細怨」のプロットの類似性の高さである。この類似は施叔青が模倣を通じて張愛玲へオマージュを捧げたものではないだろうか。以下、典型的な場面を両作から引用する。

この激動する社会では、金も土地も、永遠と見なされている全てのことが、まったくあてにならない。あてになるのは自分の胸から出るこの息と、隣で眠っているこの人間だけ。流蘇はふと柳原の側ににじり寄り、掛けぶとんの上から彼を抱きしめた。⁶²（「傾城の恋」）

天候が急変したとき、傍らにいるこの男だけが頼りだった。彼と彼女はこんなに近くに座っていたのだ。彼女は触れられるほど近いところに、広大な世界で知己を見つけたのだ。……（憐細）は洪俊興の懷に入りこんでしっかりと抱きしめ、互いを頼りに生きていた。⁶³（「憐細怨」）

施叔青はこの雷雨を「天崩地坼（天が崩れ地がさける）」と形容している。幼い頃から雷を恐れていた憐細は「途中で雷に打たれて死んでしまうかもしれない」と感じた。なんとか無事に家に着いた彼女は「ドアを開めると、世界には彼らという二人の男女しかいない。これは運命で、二人は一緒になるように決められているのだ」⁶⁴と思った。この描写は「傾城の恋」で白流蘇が日本軍の爆撃を経験した後「流蘇はほかのことなど知らない。この刹那、白流蘇には柳原しかなく、柳原にとっても流蘇しかいなかった」⁶⁵という感慨を連想させる。「憐細怨」は1980年代、治世の香港で起きた「傾城の恋」と考えたことを連想させる。街を変貌させた戦争や雷雨は、二つの作品における男女主人公の結婚・恋愛を成就させたからだ。

「憐細怨」のヒロインが「黄憐細（ウォン・スーシー）」という名前であるのは、リチャード・メイソンの香港を舞台とした小説『スージー・ウォン（蘇絲黃）の世界』に由来していると指摘されている⁶⁶〔池上2011:166〕。しかし、この「憐細」という名前は、張愛玲の「香港伝奇」シリーズの一篇「第二炉香」の影響も受けているのではないだろうか。「第二炉香」の主人公は香港在住の英国人大学教授のロジャー（羅傑）で、彼は同じく香港在住の英国人女性のスージー（憐細）と結婚したものの、性に関しては完全に無知だったスージーは、初夜に逃げ出し、夫が性異常者だと訴える。まわりの誤解と悪意によって、名誉と職場を失ったロジャーは自殺してしまう。1940年代に張愛玲が書いた物語では、憐細は性に全く無知なのだが、40年後の物語では、同じ憐細という名前を持つ女性は性に溺れている。おそらくこの二つの物語はどちらも香港という都市の「魅力」によって成り立っているのだろう。他の都市であれば、二人の「憐細」の性愛観はそれほど「極端」ではなかっただろうし、ロジャーや洪俊興とこれほど波乱に満ちた関係になることもなかったか

⁶² 注1所掲書、239頁。

⁶³ 注2所掲書、211頁。原文：「在這天地變色的時候，旁邊這男人是她惟一的依靠，他和她坐得這樣近。近在咫尺，她可以觸摸得到的，憐細在茫茫天涯找到了知己。……（憐細）躲進洪俊興的臂腰裏，緊緊抱住他，和他相依為命。」

⁶⁴ 注2所掲書、211頁。原文：「掩上門，世界上只有他們兩個人，一男一女，這都是命，註定他們要在一起的。」

⁶⁵ 注1所掲書、235頁。

⁶⁶ 池上貞子「文学作品に見る『スージー』と香港」（『張愛玲 愛と生と文学』、東方書店、2011年、166頁）。

もしれない。施叔青は張愛玲の作品に登場する「憐細」という名前を使い、「憐細怨」で香港という場所の重要性を強調しているように思われる。

ともあれ、この両作品は同じく「華僑」である范柳原と憐細が憧れていた「中国的イメージ」を異性に投影しているが、その表現とはどういったものであろうか。また、その「中国的イメージ」は恋愛の発展にどのような役割を果たしているのだろうか。

III. 「本物の中国女性」と「純粋な中国男性」

「傾城の恋」に登場する范柳原は32歳。父親の死後、非嫡出子であったために遺産相続権の問題で中国にいる范氏一家と揉めたためイギリスで育った。范柳原は白流蘇に向かって「僕たちの周りのあました悪事や悪人を、うんざりするほど目にしてこられたのでしょうか。でももしあなたが、そういうものにいま初めて出会ったのだとしたら、いまよりもっと耳障りで辛く感じただろうと思うんです。僕がそうでしたから……。中国に戻った時には、僕はもう二十四歳になっていました。自分の故国についてたくさんの夢を描いていたんです。でも、僕がどんなに失望したか、あなたにはわかるでしょう」⁶⁷と語っている。東洋に関する書籍を読み、大きな情熱を持って東洋を訪れた西洋人の多くが自分の幻想とは正反対の現実を目の当たりにして幻滅するのと同じように、もともと故郷である中国に憧れを持っていた范柳原も現実の中国に失望したのである。しかし、その失望は彼をかつて自分が夢見ていた中国に執着させることにもなった。そのため、彼は白流蘇に出会った時、「あなたのような本物の中国女性って、そうめったにお目にかかれませんかね」「本物の中国女性は世界一素晴らしい。永遠に時代遅れになることはありません」「あなたは正真正銘の中国人」⁶⁸と感嘆したのである。

白流蘇は封建的な大家族に生まれた。白氏一家は「生活の胡弓に追いついてゆけない」時代遅れの存在である。范柳原の目には、そのような家庭環境で育った白流蘇の特技は「俯くこと」と映る。「何も言わずに俯く」という動作はまさに「繊細で内向的、自分の考えを表現するのが苦手」という東洋の古い国の女性のイメージと一致しているからだろう。また、白流蘇の服装に関する范柳原のコメントも注目に値する。

柳原はしばらく考えてから、また、「でも一つだけ、あなたが旗袍を着て森のなかを走っている姿は想像できませんね……もっとも、旗袍を着てないあなたも想像できませんが」流蘇は慌てて下をむいた。「ご冗談ばかり」「これは真面目な話です。初めてお会いしたとき、あなたは腕をむき出しにするような流行物の袖無しなど着ないほうがいいのと思いました。かと言って、あなたには洋服もふさわしくありません。満州式の旗袍のほうが似合うのかもしれませんが、輪郭が硬すぎるのです」「結局、器量の悪い者はどう着飾ったってぶざまなだけですわ」柳原は笑いながら、「誤解しないでください。僕が言いたいのは、あなたがこの世の人とは思えないということです。ふとした仕草にロマンティックな雰囲気が感じられ

⁶⁷ 注1所掲書、201頁。

⁶⁸ 注1所掲書、195-196頁。

て、まるで京劇を演じているみたいなんです」。⁶⁹

范柳原から見れば、「腕をむき出しにするような流行物」も「洋服」も白流蘇には合わず、「満州式の旗袍」はかろうじて似合うが「輪郭が硬すぎる」。それは、そうした衣服では白流蘇の柔らかさや美しさを引き出せないということだろう。要するに、当時の服装は白流蘇と完璧には合わせられないのだ。范柳原はそれを、白流蘇には京劇のようなロマンティックな雰囲気があるからだと説明する。張愛玲は散文「洋人看京戲及其他」の中で京劇について以下のように述べている。

京劇の中の世界は眼前の中国でもなく、古代の中国のある段階でもない。その美しさ、狭く整然とした道德体系は現実からかけ離れたものだが、決してロマンティックな逃避ではない。⁷⁰

范柳原の目に映る白流蘇は、彼が深く失望した中国の現実と正反対の存在であることがわかる。旧式の家庭に育った控えめなチャイナドレスが似合う女性は、イギリスで人生の前半を過ごした范柳原の遠い祖国への美しい幻想と重なる。范柳原が言った「本当の中国」とは、おそらく白流蘇が持つ特徴、すなわち当時の中国から距離を置いた「古い中国」を連想させる要素だろう。

一方で、「憐細怨」の憐細はアメリカ人の夫と離婚した後、洪俊興という「ごく普通で中国的特徴が強い中年男性」⁷¹と出会った。「華洋雜居の社交界に挟まれた」⁷²憐細は、洪俊興によって「純粹な中国人男性の可愛らしさをはじめて発見した」⁷³。以下、洪俊興についての描写を通じて、憐細が彼女にとっての「純粹な中国」を異性にどのように投影しているのかを明らかにしていく。

洪俊興が印刷会社のオーナーで英語を解さず「よその土地のなまりの広東語」⁷⁴を話すのを憐細は「新鮮」に感じた。二人で食事をした後に憐細が勘定を払おうとした行為は洪に「最大の恥辱」と見なされる。そのことから憐細は、彼のことを妻や子供の前では「極端な亭主関白」に振る舞う人だと想像した。20年前に上海から船で香港に渡り、裸一貫で起業して規模の小さくない印刷工場を建てたという洪俊興の経歴を聞いて、憐細は「このような無一物の人が、中国人特有の苦勞を厭わない精神と不屈の根氣によってついに自分の世界を切り拓いたことには、感服のほかなかった」⁷⁵と思う。

洪俊興は憐細を中国に関するギャラリー、博物館、展覧会、レストランなどに度々連れて行った。その過程で彼女は彼の「心遣いが至れり尽くせり」で、「まるで里帰りしたように、すべてが馴染み深く、快適で暖

⁶⁹ 注1所掲書、207-208頁。

⁷⁰ 張愛玲「洋人看京戲及其他」（初出は上海『古今』第34号、1943年11月）。本論での使用テキストは、張愛玲『張愛玲典藏全集8』（皇冠文化出版有限公司、2001年、15-16頁）。原文：「京戲裡的世界既不是目前的中國，也不是古中國在它的過程中的任何一階段。它的美，它的狹小整潔的道德繫統，都是離現實很遠的，然而它絕不是羅曼蒂克的逃避。」

⁷¹ 注2所掲書、199頁。原文：「極普通、中國味十足的中年男子」。

⁷² 注2所掲書、200頁。原文：「夾在華洋雜處的社交圈」。

⁷³ 注2所掲書、201頁。原文：「第一次發覺純粹的中國男子有他的可愛」。

⁷⁴ 注2所掲書、200頁。原文：「操外省口音的廣東話」。

⁷⁵ 注2所掲書、203頁。原文：「這樣一個一無所有的人，憑著中國人的吃苦精神和不屈的毅力，終於闖出自己的天地，憐細只有全心佩服。」

かい」⁷⁶と感ずるようになる。しかし、同時に憐細は洪俊興を「論理的觀念がなく、アカデミックな訓練が足りないために彼の話は愚かでばかばかしい」⁷⁷と嘲笑してもいる。憐細は、洪俊興と自分の大きな違いをよく知っていた。それだけでなく、「彼は伝統的な中国人男性であり、どんなに彼女を愛しても、家庭を壊してまで彼女と一緒に暮らすことはできない」⁷⁸ことも分かっていた。

要するに、「憐細怨」に於ける「純粋な中国男性」である洪俊興は、勤勉で真面目ではあるが、英語も話せず、アカデミックな教養も欠けた伝統的な亭主閑白である。見逃すことができないのは、憐細が異性に投影する「中国的イメージ」の特徴は、前述の范柳原が夢見る「本当の中国」の特徴とほとんど重ならないことだ。范柳原が憧れたのが「伝統中国」だとすれば、憐細が惹かれたのはむしろ、1970年代から1980年代にかけての思想や文化では明らかに陳腐だが改革開放の成果を上げた「現代中国」であったと考えられる。憐細は自分の肉欲を満たすために洪俊興を必要としたが、この「純粋な中国男性」は「あらゆる面で自分より劣っている」⁷⁹とも思っていた。

「傾城の恋」の范柳原も、「憐細怨」の憐細も、恋愛の相手が「本当の中国女性」・「純粋な中国男性」であることを香港で発見したことには興味深い。「華洋雜居」の香港だからこそ、白流蘇と洪俊興の「中国的特徴」が際立つのである。

張愛玲は「第一炉香」で「イギリス人が遠くからはるばる来てくれたのだから、少しは中国を見せてやらねばならないというわけです。しかしここ（香港）にある中国は、西洋人の心の中にある中国でした。でた らめで、手がこんでいて、滑稽な」⁸⁰と書いている。こうした香港イメージは「傾城の恋」にも反映されている。

柳原が笑いながら、「香港ホテルっていったら、わたしの知ってるなかでも最も古めかしいダンスホールですよ。建築、照明、インテリア、楽団、どれもこれも旧英国式なんです。四、五十年前ならすこぶるモダンな代物だったんですが、いまじゃあまりゾッとしませんね。実際、見るほどのものはなにもありません。ただし、あのへんでこりんな格好をしたボーイは別ですよ。この暑いさなかに北方人のまねをして、裾のすぼまったズボンをはいてる」流蘇が聞いた。「どうしてですか？」柳原は「中国ムードを盛り上げるためですよ」。⁸¹

張愛玲の叙述では、香港は「西洋でも東洋でもない」植民地であり、香港にあるすべての「中国的」要素は、西洋人の好みに合わせ存在していた。しかし「憐細怨」では、東洋文化を愛している米国人のディックは「中国を探す」ために香港に来たものの、香港の「中国的特徴」でさえも「サンフランシスコのチャイナタウン」ほどにも強くなかったため、深く失望している。ここでいう「中国的特徴」とはもちろん、張愛玲

⁷⁶ 注2所掲書、202頁。原文：「把她照顧得太無微不至」「使她有著回娘家作客的感覺，一切都是熟悉，舒適而溫暖。」

⁷⁷ 注2所掲書、220頁。原文：「譏笑他沒有邏輯觀念、缺乏學院訓練所說的話永遠愚蠢可笑。」

⁷⁸ 注2所掲書、215頁。原文：「他是個傳統的中國男人，不論怎麼愛她，也不可能拆散他的家，來和她生活在一起。」

⁷⁹ 注2所掲書、214頁。原文：「處處比自己差勁」

⁸⁰ 注4所掲書、4頁。

⁸¹ 注1所掲書、190-191頁。

が書いた西洋人の心の中の中国であろう。両作品における「香港の中の中国」は、現実にはまったく存在しないもの、あるいは人為的に創造されたものと言っても過言ではない。

長い間西洋で教育を受けてきた范柳原や慄細のような華僑が香港にいる中国大陆で育った白流蘇や洪俊興に香港で出会った時、当然彼女／彼のことを「本物の／純粋な中国人」と感じる。それは「華洋雜居」の植民地である香港だからこそ可能になった恋だった。白流蘇や洪俊興が「本物の中国女性／純粋な中国男性」であることが、恋愛の発展を促進したからである。しかし一方で、「純粋な中国男性」の特徴は、慄細と洪俊興の関係の阻害ともなる。例えば、洪俊興が慄細に愛を告白した後の慄細の心理は以下の通りである。

洪俊興は慄細を愛している。洪俊興が言わなくても、慄細にはわかっている。……慄細には、洪俊興は伝統的な中国人男性であり、どんなに慄細を愛しても、家庭を壊してまで慄細と一緒に暮らすことはできないことも分かっている。たとえ洪俊興にそれができたとしても、慄細はそうしたいだろうか。洪俊興と一生一緒にいるのだろうか？慄細はそのことを想像する勇気がなかった。⁸²

慄細は洪俊興という「自分より劣っている」男を理性上では受け入れられないが、無意識のうちに洪俊興と結婚する可能性を考え始める。

慄細は洪俊興の懷で仰向けになり、心の中で不可能だと知っていたのに、かすかな希望を持ってしまった。彼女はとぎれとぎれに言った。「たぶんいつか、私がとうとう屈したら、私たちは本当に一緒にになれるわ。たぶんいつか——」

……

それから、洪俊興は慄細にそれは不可能だと伝えた。20年以上営んできた、自分の手で築き上げた家庭を壊すにはあまりにも大きな勇気がある。洪俊興は軟弱すぎるので、慄細を失望させてしまうだろう。

83

慄細が予想したように、「伝統的な中国人男性」である洪俊興は不倫の恋のために家庭を捨てようとはしなかった。二人の間には、文化や生活習慣の違いだけでなく、洪俊興の揺るぎない道徳観念による隔たりもある。その後、慄細は「肉欲の誘惑」に抵抗できずに再び洪俊興に付きまとうようになるが、結局二人が別れの結末に向かうことは避けられなかった。

施叔青は張愛玲が「傾城の恋」で描いたテーマ、つまり華僑が帰国後に恋に落ちる物語を模倣したが、「慄細怨」の男女主人公は范柳原と白流蘇のようなハッピーエンドを得られなかった。次節では、1940年代の時代背景と作家自身の経験を結びつけながら、「傾城の恋」と「慄細怨」で人物の性別が逆転している理由と、

⁸² 注2所掲書、215頁。原文：「他愛她，不用他明說，她也感覺得出。……她看出他是個傳統的中國男人，不論怎樣愛她，也不可能拆散他的家，來和她生活在一起。就是他會。她肯嗎？和這個人廝守一輩子？慄細不敢想象。」

⁸³ 注2所掲書、222頁。原文：「慄細在他懷中仰著臉，心裏明知不可能，可是又不自禁浮上一種極渺茫的希望，她一頓一頓地：『也許有一天，我終於屈服了，我們真的可以在一起，也許有一天——』……然後洪俊興告訴她，這是不可能的，打碎他經營二十多年，一手建起的家，需要太大的勇氣，他太軟弱，恐怕要讓慄細失望。」

両作品の結末が異なる原因を明らかにしていく。

IV. 正反対の結末

離別に満ちた乱世の香港を舞台にした「傾城の恋」はなぜハッピーエンドを迎えたのだろうか。張愛玲は散文「燼余録」の中で、「戦時下の香港で見聞きしたことは、私に切実で劇的な影響を与えている」⁸⁴と書いている。倪文尖⁸⁵は、太平洋戦争開始直後の香港で経験したことは張愛玲の人生観と文学観の重要な構成部分だと指摘している[倪 2002:87-93]。特に 1940 年代に突如として起こった香港の陥落は、張愛玲に人生の無常さを深く認識させた。張愛玲がそれによって得た「教訓」は、「やりたいことをすぐにやっても遅すぎるかもしれない。『人間』は最も不確かなものである」⁸⁶というものだった。似たような記述は「傾城の恋」にも見られる。夜中に白流蘇に電話した范柳原は次のように語っている。

「……『死ぬも生きるも離るるも・かの日の誓い汝が手を・執りていましともろともに・老いむと言ひしことも夢』(『詩経』『擊鼓])。僕は中国語がからきしだめだから、ちゃんと理解できてるかどうかはわかりませんが、これはとても悲しい詩だと思います。生と死と別離はみな『大事』で、僕たちのコントロール外にある。外界の力に比べて、僕たち人間の力は微々たるものでしかない。それでも人間はあくまでこう言いたがる。『私は永遠にあなたと一緒にいたい。一生涯離れることはない。』なんてね……まるで自分たちで思いどおりにできるようなつもりなんですよ。」

張愛玲の考えでは、人間の力では天災地変がもたらす不幸を克服することはできない。香港陥落後の 18 日間に「私たちの身勝手と空虚」を目撃した張愛玲は、「すべての虚飾を取り除けば、残されたものは飲食と男女の二つだけのようだ」と認識した⁸⁷。このような考えは、「傾城の恋」の結末につながっているだろう。日本軍の爆撃を受けた後に范柳原が白流蘇との結婚を決意したのは、大きな異変と空虚な「不確実性」の中で少しでも「確実性」をつかみみたかったからにすぎない。「身勝手な男」と「身勝手な女」が平凡な夫婦になることで戦乱の世での居場所を得ようとする姿は、張愛玲のいう「飲食男女」⁸⁸を最もよく表現している。戦争が一段落すると、白流蘇は范柳原が浮気の本性を改めないことに少し失望するが、総じてこの物語は「ハッピーエンド」とも言える。

では、治世の香港を舞台にした「憐細怨」では、憐細と洪俊興の物語の結末はなぜバッドエンドなのだろう。施叔青はインタビューで「香港の物語」について以下のように語っている。

⁸⁴ 張愛玲「燼余録」(初出は『天地』第 5 号、1944 年 2 月)。本論での使用テキストは、張愛玲『張愛玲典藏全集 8』(皇冠文化出版有限公司、2001 年、112 頁)。原文:「戦時香港所見所聞、唯其因為它對於我有切身的、劇烈的影響。」

⁸⁵ 倪文尖「上海/香港:女作家眼中的「雙城記」—從王安憶到張愛玲」(『文学評論』、2002 年 1 月、87-93 頁)。

⁸⁶ 注 38 所掲書、原文:「想做什麼,立刻去做,都許來不及了。『人』是最拿不準的東西。」

⁸⁷ 注 38 所掲書、原文:「我們的自私與空虚」「去掉了一切的浮文,剩下的仿佛只有飲食男女這兩項。」

⁸⁸ 原文は孟子になっているが、ここ引用した「飲食男女、人之大欲存焉」というのは『礼記・礼運篇』の中の文。『孟子・告子篇』には「食色、性也(食欲と色欲とは人間の本性である)」とある。

私は姉の施淑（彼女は文芸評論家である）に同意する。姉は私の「香港物語」が「表面的には贅沢三昧の生活をリアルに描くものだが、実際には否定的な批判の役割を果たしている」と言っている。私は、この短編シリーズは魂のない上流社会の墮落した空虚な生活を暴露するだけでなく、より深い意義を持つべきだと自覚し、真面目に書いている。⁸⁹

「より深い意義」と結びつけると、「慄細怨」がバッドエンドとなったのは、洪俊興の伝統的な家庭観念だけでなく、施叔青による1980年代香港社会への観察が反映されているのだとも考えられるかもしれない。

1980年代の香港には戦乱こそなかったものの、政治情勢は複雑であった。1970年代、中国と英国はすでに香港返還について交渉を始めていた。1972年3月、中国国連代表の黄華は中国政府の「条件が成熟した」時に香港の政治的地位の問題を解決すると発言し、同年11月には国連は香港を植民地リストから除外した。1979年3月に香港総督マクレホースが北京を訪問した際、鄧小平は香港問題をいずれ解決すると発言した。1981年3月、英国議会は『英国国籍（香港）法』を可決し、250万の香港人の英国での居住権を剥奪し、英国政府が1997年の香港返還を準備していることを示した。1984年12月、『英中共同声明』の署名によって、香港の将来はようやく「確定」した⁹⁰[高2013:340]。

1980年代の香港には「返還」にまつわる不安な空気が漂っていた。そして一定程度、その不安は文学作品にも反映されていた。たとえば、劉以鬯の「一九九七」⁹¹（1982）は、返還によって様々な悪影響が出ることを心配する中で事故死する香港人の物語である。也斯の「島與大陸」⁹²（1987）は、香港と中国の社会制度の違いと東西両洋の文化の衝突を見つめ、憂国の心情を表現した。どちらも香港作家が「香港返還」への不安を小説で表現したものである。

伍寶珠⁹³は、「慄細怨」のテーマは資本主義社会の人間に対する異化であるとし、現代社会における自立した女性がセクシュアリティの危機に直面した時の複雑な心理状態や境遇を暴露したものと分析している[伍2006:160]が、1981年7月に創作された「慄細怨」も、「返還への不安」の影響を受けていた可能性があるのではないだろうか。

洪俊興と交際していた時、慄細は常に彼との上下関係を気にしていた。特に洪俊興の愛人になった後、彼女は葛藤を抱えることになる。当初慄細は「ちょっと気が弱くなって自分を彼に与えただけで、この時この場所じゃなかったら、こんなことは決してあり得なかった」⁹⁴と思っていた。しかし洪俊興は「自分より劣っている」にもかかわらず、「彼女に完全な愛を与えることができず、彼女にとって彼の妻子が最大の強敵」⁹⁵

⁸⁹ 施叔青『一夜遊—香港的故事』（香港三聯書店、1985年、308頁）。原文：「我比較同意姐姐施淑（她是文藝評論者）所說的，她覺得我的「香港的故事」「表面上時有聲有色的酒肉爭逐，事實上是達到否定的批判作用。」我自覺寫這一短篇系列的態度還是很嚴肅的，不僅是暴露上層社會聲色犬馬、沒有靈魂的空虛生活，應當還有更深的意義。」

⁹⁰ 高馬可（著）林立偉（訳）『香港簡史』（中華書局香港有限公司、2013年7月、340頁）参照。

⁹¹ 劉以鬯「一九九七」（原題：前途）（『成報』、1982年11月-1983年1月）。

⁹² 也斯「島與大陸」（『八方文藝叢刊』第5期、1987年4月）。

⁹³ 伍寶珠『書寫女性與女性書寫—八、九十年代香港女性小說研究』（台北大安出版社、2006年10月、160頁）参照。

⁹⁴ 注2所掲書、214頁。原文：「在一時之間的脆弱，把自己給了他，換上另一個時空，這種情形永不可能發生。」

⁹⁵ 注2所掲書、220頁。原文：「他不能給她完整的情愛，他的妻子、家族是她最大的勁敵。」

となる。洪俊興の妻に対する憐細の嫉妬心からも、「愛人」という身分に彼女が抵抗感を持っていることがわかる。また、憐細は洪俊興が自分を本当に愛しているとしても、「自分はこの印刷工場の社長の人生の中では小さな装飾にすぎない」⁹⁶ことを知っていた。憐細が、「このままでは、いつか気が狂うだろう」⁹⁷と感じたのは、洪俊興との関係を断ち切ることも「付属品」になることもできないという心理を示している。

「憐細怨」において、張愛玲から影響を受けた施叔青が華僑である主人公の性別を男性から女性に変えたのは決して偶然ではないだろう。施叔青は、恋愛関係において女性が一般的に受け身であることに仮託し、中国との関係における香港の従属的な地位を暗示していたのではないだろうか。

何度も争いをした末に、洪俊興と憐細の関係はついに終わりを告げた。最後の喧嘩で、洪俊興は憐細を喜ばせようとルビーのイヤリングを取り出す。その瞬間、憐細は洪俊興との関係は「売買」にすぎない、あるいは自分が男性のおもちゃにすぎないことを悟った。憐細は洪俊興を押しつけ、ドアを開けて走り去る。一晚中浜辺をさまよった末、憐細は堪えきれず、「内臓を吐き出しそうになるほど、命がけで嘔吐した」⁹⁸。ここで物語は閉じられる。

李今⁹⁹は、憐細の嘔吐を「洪俊興に対する最後の否定であるが、これは理性と精神による肉体の否定ではなく、自分を支配しようとする男権的観念と行為に対する否定だ」と指摘する[李 1994:68]。確かにそうした心理があったろうが、「憐細怨」が創作された時代背景を考えると、憐細の嘔吐行為には「返還」に直面した香港人の心理も表れているのではないだろうか。香港人の「返還」に対しての矛盾と不安、疎外された立場への抵抗感が、恋愛の破綻と「嘔吐」を通じて表現されているとも考えられるのではないだろうか。

V. おわりに

最後に、「外来者」である二人の作家の香港に対する態度についても説明しておきたい。張愛玲は「香港伝奇」シリーズは上海人のために書いたと述べている。朽ち果てた古い中国では描くことのできなかった恋愛物語は、新奇で華麗な「偽東洋」である1940年代の香港に移されて描かれた。しかし、「傾城の恋」の結末が示したように、香港は男女主人公の安住の地ではない。白流蘇の願いが叶ったとき、香港も物語の舞台から退場した。張愛玲は香港を観察し描写する時に、一定の距離を置き、植民地香港の様々な側面を、主観的な評定を避けて冷静な筆致で描きとめたのである。一方で、施叔青にとって香港は、「世界に感嘆する（嘆世界）」場所である。施叔青は「世界中で香港ほど私の創作に有利な場所は見つけられないと思う。……ここ（香港）に住むのはとても楽しい。外国人の情事を書いているが、香港人はそれを理解してくれるし、台湾の読者は新鮮に感じてくれる」¹⁰⁰。「憐細怨」には、施叔青が香港に対して持っている優越感と、猟奇的な心理も垣間見えるようだ。「外来者」である施叔青は香港に共感しているようだが、香港人の憐細についての描写か

⁹⁶ 注2所掲書、215頁。原文：「自己不過是這個印刷廠老板生命裏小小的點綴。」

⁹⁷ 注2所掲書、226頁。原文：「這樣下去，她有一天會發瘋。」

⁹⁸ 注2所掲書、227頁。原文：「用盡平生之力大嘔，嘔到幾乎把五臟六腑牽了出來。」

⁹⁹ 李今「在生命和意識的張力中——談施叔青的小說創作」（『文学評論』、1994年4月、68頁）参照。

¹⁰⁰ 注42所掲書、299頁。原文：「我覺得在全世界找不到第二個地方像香港這樣有利於我的寫作。我是從臺灣來的，臺灣的社會比較封閉，沒有香港的『國際性』，我也住過紐約，但在那裏寄人籬下，很寂寞……我在這兒住得很開心，寫些洋人圈子的情事，香港人能了解，臺灣的讀者也覺得新鮮。」

らも、中国人である洪俊興についての叙述からも、施叔青が「俯瞰する目線」で香港と中国を観察していることは否定できない。

以上、施叔青が「張派の後継者」として張愛玲の「傾城の恋」をどのように模倣して華僑の帰国後の恋愛をテーマにした「慄細怨」を創作したかを分析した。それを通じて、二人の作品にそれぞれ登場する「本物の中国女性」と「純粋な中国男性」は、華僑が想像する中国を異性へ投影したものであり、両作品の舞台が「華洋雑居」の香港であることで華僑の恋愛相手における「中国的イメージ」がさらに際立ったことを明らかにした。また、「傾城の恋」の范柳原が白流蘇に投影した想像は「伝統中国」に近いものであるのに対し、「慄細怨」の慄細が洪俊興に投影した想像は1949年以降の「現代中国」に近いものであった。そのような「中国的イメージ」は華僑の恋愛に重要な役割を果たしたが、「慄細怨」ではまさにその「伝統的な中国男性」性が二人の感情に亀裂が生じた原因となっている。

さらに、本文は文藝創作の角度から「傾城の恋」と「慄細怨」の結末が異なる原因を分析した。「傾城の恋」の「ハッピーエンド」には、戦時中の香港での張愛玲の経験も関わっていたと考えられる。「傾城の恋」では、誰も自分に危険があると感じて恐れている「不確実性」に満ちた「乱世」の香港で、范柳原と白流蘇は身近にいる恋人と結婚して家族を築くことで、ほのかな平穏や「確実性」を得ようとした。さらに言えば、張愛玲が『傾城の恋』を執筆したのは1943年の上海である。太平洋戦争の最中、日本に占領された上海は、1941年12月の香港と同じ様に不確実性に満ちた不安な社会であり、平凡な結婚こそが「確か」であると切実に感じられたことだろう。

一方で、「慄細怨」は1980年代の「治世」香港で創作された作品だが、慄細と洪俊興が別れるという結末は、「傾城の恋」とは違う意味で当時の「不確実性」を浮き彫りにしている。同じく1980年代の香港を舞台にした黄碧雲の小説「盛世恋」は、「太平の世では、個人が経験する最大の『戦乱』とは幻滅にほかならない」¹⁰¹と書いている。そう考えると、慄細は二回の幻滅を経験したと言える。一回目は西洋人の夫であるディックとの離婚であり、もう一回は中国人の恋人である洪俊興との別れだ。特に二回目の幻滅は、従属的な地位に甘んじて男のおもちゃになることは到底受け入れられないという事実を慄細に悟らせた。この慄細の経験には香港の境遇と共通するものがあるとは考えられないだろうか。「慄細怨」で、施叔青は「返還」に直面する香港についての観察をも表現したと考えられる。

見逃せないのは、「傾城の恋」では男女主人公は無事に結婚したものの、最終的に白流蘇は、范柳原が自分に忠実ではなく、再び女遊びを始めたことを憂えていることである。この点はハッピーエンドに隠された「危機」であり「苦味」であると言えるだろう。一方で、「慄細怨」の慄細は辛い思いをして洪俊興と別れたが、それは自分が独立した個体であり、もう他人に物質化されたり、翻弄されたりしないという決意に支えられたものでもある。作者は嘔吐した後の慄細がどうなるかを詳しく説明していないが、おそらく彼女は二度と「付属品」になることを選ばないだろう。これはバッドエンドに隠された「希望」であり「甘味」であると言えるのではないだろうか。

¹⁰¹ 黄碧雲「盛世恋」(『其後』天地圖書有限公司、1991年、47頁) 原文:「太平盛世, 個人經歷最大的兵荒馬亂不外是幻滅。」

参考文献

日本語（五十音順）

- 池上貞子 2011『張愛玲 愛と生と文学』東方書店, 166.
- 張愛玲（著）池上貞子（訳） 1995『傾城の恋』平凡社, 157-243.
- 張愛玲（著）濱田麻矢（訳） 2017『中国が愛を知ったころ：張愛玲短篇選』岩波書店, 3-90.
- 張愛玲（著）藤井省三（訳） 2018『傾城の恋／封鎖』光文社古典新訳文庫, 11.

中国語（拼音順）

- 成湘麗 2012「契合与偏離—論《憐細怨》对《傾城之恋》的寄情書写」『名作欣賞』8, 23-25.
- 高馬可（著）林立偉（訳） 2013『香港簡史』中華書局香港有限公司, 340.
- 黃碧雲 1991「盛世恋」『其後』天地圖書有限公司, 47.
- 黃靜 2005「香港・女性・伝奇—《傾城之恋》、《香港的情与愛》、《憐細怨》比較」『華文文学』69期, 30-35.
- 金宏達（編） 2003『回望張愛玲・華麗影沈』北京文化藝術出版社, 238.
- 李今 1994「在生命和意識的張力中—談施叔青的小説創作」『文学評論』4, 61-68.
- 倪文尖 2002「上海/香港:女作家眼中的「雙城記」—從王安憶到張愛玲」『文学評論』1, 87-93.
- 施叔青 2003『憐細怨』上海文芸出版社, 196-227.
- 王晋民；鄭白曼（編著） 1983『台湾与海外華人作家小傳』福建人民出版社, 141.
- 王德威 2004『落地的麦子不死—張愛玲与張派伝人』山東画報出版社, 2.
- 伍寶珠 2006『書寫女性與女性書寫—一八、九十年代香港女性小説研究』台北大安出版社, 160.
- 夏志清（著）劉紹銘等（訳） 2001『中国現代小説史』香港中文大学出版社, 335.
- 張愛玲 2001『張愛玲典藏全集 8』皇冠文化出版有限公司, 15-112.
- 趙玉茵 2011「一個故事的兩種講法—比較閱讀張愛玲《傾城之恋》、施叔青《憐細怨》」『青年文学家』2, 6-7.

（神戸大学大学院人文学研究科）